

令和 2 年 5 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03108

研究課題名(和文) 近世後期の市場変動と肥料商

研究課題名(英文) Market Fluctuations and Fertilizer Merchants in the Late Modern period

研究代表者

白川部 達夫 (Shirakawabe, Tatsuo)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40062872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近世後期の市場変動の中で、肥料商がどのように対応したかを検討することであった。阿波と播磨を対象に調査と分析を行った。阿波国では藍作農民に藍商が魚肥を前貸しして、藍葉で決済していた。しかし19世紀になると新興の藍商が展開し、前貸し利子も低下し、現金決済が多くなったことを明らかにした。播磨国では、姫路藩の支配下で室津の干鰯問屋が市場を独占していたが、19世紀には飾磨港が干鰯市場を開設し、独占が崩れていった。こうしたなかで農村肥料商の仕入れ先が室津から飾磨、さらに兵庫(神戸)へと変化したことを指摘した。また大坂干鰯屋と諸藩の干鰯販売の関係を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来、前資本主義的な高利貸し資本として、農民への吸着が強調されていた肥料商について、その経営実態を実証的に明らかにする。これを通じて前期資本に対する固定的な見方を改めることができれば、日本の近代化に対する商業資本の役割も大きく見直すことができよう。研究では、大坂・播磨・阿波の肥料商の動向を検討したが、いずれの土地でも、社会変動のなかで肥料商が積極的に対応を行ったこと、またとくに阿波では幕末維新期に小規模肥料商がそれまでより農民に有利な肥料販売を行うようになり特産物藍の生産拡大に役立ったことを指摘した。商業資本といえども一方的に農民に吸着しただけではなかったといえる。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to examine how fertilizer merchants responded to the market fluctuations in the late modern period. Awa and Harima areas were chosen for the survey and analysis of the market.

In Awa area, indigo merchants advanced fish manure to indigo farmers and settled it with indigo leaves. However, it was revealed that in the 19th century, as new indigo business developed, advance loan interest declined and, accordingly, cash settlements increased. In Harima area, dried sardine wholesalers in Murozu dominated the market under the control of the Himeji clan. However, in the 19th century, as Shikama Port was opened for a dried sardine market, the monopoly collapsed. Under these circumstances, this study pointed out that suppliers to rural fertilizer vendors were shifted from Murozu to Kazama, and then, to Hyogo (Kobe). The relationship between dried sardine wholesalers in Osaka and retailers of dried sardines in various fiefs was also examined.

研究分野：人文学

キーワード：干鰯 鮮粕 粕 肥料商 地域市場 干鰯問屋

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

日本の近代化の前提として、ブルジョアの発展を農業から探ろうとした戦前・戦後の研究は、干鰯・鰯粕、鮭粕などの購入肥料の多量投下による木綿・菜種作などの特産物生産が発展した事実を明らかにした。戸谷敏之『近世農業経営史論』(日本評論社、1949年)は、日本近世農業を西南型と東北型に二分し、西南型の多肥多労働的な先進農業の展開を指摘した。また西南型を摂津型と阿波型にわけて、摂津型に近代の前提となる農民的剰余の蓄積の可能性を指摘した。これを受け継いだ古島敏雄・永原慶二『商品生産と寄生地主制』(東京大学出版会、1954年)は、大坂近郊木綿生産地帯で肥料価格の高騰と木綿など農産品価格の低迷から、天保期における転換(挫折)を指摘し、特権的都市株仲間商人や肥料商人の前期的商業高利貸し資本のブルジョアの発展への吸着を強調した。一方、山崎隆三『地主制成立期の農業構造』(青木書店、1961年)などは明治の松方デフレ期まで、西摂津の木綿作地帯ではブルジョアの富農経営が存在したことを指摘し、挫折論の限界を指摘した。富農の存在は、八木哲浩・塩野芳夫・岡光夫なども指摘するところであり、地主化が天保期頃から進んだものの、一定数の富農経営の存在も続いたことが明らかとなった。しかしこれらの研究では、肥料および肥料商の展開については、ほとんどふれられることがなかった。

その後、1990年代になって肥料流通については原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、1996年)、中西聡『近世・近代日本の市場構造』(東京大学出版会、1998年)が出版され、さらに2000年代には石井寛治・中西聡『産業化と商家経営』(名古屋大学出版会、2006年)、中西聡『海の富豪の資本主義』(名古屋大学出版会、2009年)、中西聡・井奥成彦『近代日本の地方事業家』(日本経済評論社、2015年)など優れた研究が出た。これらにより、魚肥問屋仲間や全国流通については飛躍的に研究が進んだ。しかし原直史の仕事以外は、基本的には近代の研究であり、またその問題関心も商業的蓄積の近代産業への転化にあった。したがって、近世の在地の肥料商人や消費者である農民との関係、いわゆる肥料消費市場についてはほとんど研究がないのが現状である。近年、岡島永昌「大坂から大和への肥料流通」(『ヒストリア』213号、2009年)、荒武賢一郎「一九世紀近江湖東地域における魚肥流通」(『市場史研究』29号、2010年)などの研究が出たが、これも流通状況の解明にとどまっており、消費市場の検討は行われていない。この点では、1970年代に荒居英次「近世農村における魚肥使用の拡大」(『日本歴史』264号、1970年)が、包括的指摘をしたことから出ていない。荒居は年利40%を越える肥料商人の高利の前貸し、出来秋の現物支払いと農作物の安値引き取りという前期的資本の性格が強調しているが、その主たる史料は18世紀のもので、また経営分析から導かれたものは、ほとんどない。荒居の見解は寄生地主制批判の基調を引き継いだもので、申請者は19世紀については一部引用史料に問題があることを指摘した。

申請者は白川部達夫『江戸地廻り経済と地域市場』(吉川弘文館、2001年)で、利根川中流域の在郷町龍ヶ崎における肥料商の幕末・維新期の経営を分析し、荒居英次が強調した出来秋現物決済、高利の前貸しなどが行われず、現金販売を中心に、掛け売りの場合も年利12%であった事実を指摘した。仕入れにおいても、江戸と銚子の中間にあったことから、江戸干鰯問屋の介入はなく、直仕入れ的な取引が行われていたことを明らかにした。

2006年~2007年基盤研究(c)一般「近世肥料商の基礎的研究」では、全く史料が存在しないとされていた畿内肥料商史料として、尼ヶ崎町・梶屋文書を発見した。また摂津国武庫郡上瓦林村岡本家文書の農業経営帳簿「万覚帳」のなかに、従来、注目されたことのない充実した肥料購入記録があること、また豊富な肥料商との交渉文書(送り状、請取、

書状など)があることを確認して、これらを分析した。ここでは岡本家が享保～天明期には、経営がかなり苦境にあり、肥料代など支払いが滞っていたこと、寛政期になって菜種作を拡大して収支が安定したこと、文政末年～天保初年に手作りを急速に縮小したが、この間でも反当たり収益はそれほど悪くなかったことなどを明らかにした。これらは今井林太郎・八木哲浩編『封建社会の農村構造』(有斐閣、1955年)の分析では想定されていなかったものである(白川部達夫「畿内先進地域の豪農と肥料商人」『東洋大学文学部紀要』61集史学科篇33号、2008年)。続いて2008年～2010年基盤研究(c)一般「近世後期の特産地と肥料商」では、摂津の綿作地帯に近い尼ヶ崎肥料商梶屋文書を分析して、幕末・維新时期における干鰯から鮭粕への変化、兵庫・大坂両市場との関係、販売圏の木綿作地帯から米作地帯への変動などを具体的に明らかにした(白川部達夫「幕末維新时期における畿内先進地域の肥料商」(一)(二)『東洋大学文学部紀要』62・63集史学科篇34・35集、2009・2010年)。また阿波藍生産地帯の大藍師・三木家の肥料購入文書を分析して、全国市場の変動の中で、干鰯・鮭粕、鮭粕などの仕入れ状況を明らかにした(白川部達夫「阿波藍商と肥料市場」(一)『東洋大学文学部紀要』64集史学科篇36集、2011年)。さらに従来知られていなかった関東の干鰯・鮭粕流通の拠点、関宿問屋と在地肥料商の取引、在地での肥料販売を下野国都賀郡西水代・田村家文書を分析して明らかにした(白川部達夫「近世後期主穀生産地域の肥料商と流通」『東洋学研究』47号、東洋大学東洋学研究所、2011年)。2011年～2013年基盤研究(c)一般「近世後期の肥料商と地域市場」では、肥料商として本格的分析がなかった大坂干鰯屋の近江屋長兵衛家文書を使って、大坂永代浜市場の取引実態や農村部への販売などを明らかにした(白川部達夫「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』15号、2013年、白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋長兵衛と地域市場」『東洋大学文学部紀要』66集史学科篇38集、2013年)。また新発見の近江屋市兵衛家文書により、その具体的取引や阿波への進出などを分析した(白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(一)『東洋大学文学部紀要』67集史学科篇39集、2014年)。さらに関東の下野都賀郡地域でも天保期には、販売手形が使用されるなど、市場が非人格的な性格を帯びたことを指摘し、地域市場の変容を分析した(白川部達夫「近世後期主穀生産地帯の肥料商と地域市場」『東洋大学文学部紀要』65集史学科篇37集、2012年)。平成26年～平成28年基盤研究(c)一般「近世後期の肥料商と農業経営」では、伊勢中央部の天保期における農業経営を分析し、水田と菜種作を中心に商品的農業が畿内に近い水準で営まれ、肥料も同様に投下され、単位収入も高かったが、基盤として二毛作田は少なく、その点で摂津武庫郡などの生産力とは差が出ていることを指摘した(白川部達夫「近世後期伊勢の肥料と農業経営」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』17号、2015年)。また畿内の事例として、上瓦林村岡本家の「万覚帳」の手作り経営の収支分析を行い、論文ないし報告書として発表し、改めて論文とした(白川部達夫「享保・元文期の摂津の農業経営と肥料」『東洋学研究』57号、東洋大学東洋学研究所、2020年)。また平成27年9月には、ハーバード大学ライシャワー研究所の「19世紀日本の地域市場と経済」研究会において、「19世紀前半の肥料商と地域市場」という発表を行い、同時期の肥料商と地域市場のダイナミックな展開を指摘した(白川部達夫「一九世紀前半の肥料商と地域市場」、『東洋学研究』53号、東洋大学東洋学研究所、2016年)本研究はその延長で、市場変動と肥料商の動向を検討するものである。

## 2. 研究の目的

以上、これまで全国市場にかかわる近世の江戸干鰯問屋や鯨粕市場の変動についての研究は蓄積されてきたが、大坂の干鰯屋や各地の肥料小売商の動向と地域消費市場については、全くといって良いほど研究がなかった。申請者が研究に着手してから、尼ヶ崎梶屋文書や大坂近江屋市兵衛家(東洋大学所蔵)などが発見され、手つかずになっていた阿波三木家や下野田村家などの文書群の分析から19世紀前半の肥料商と地域市場のダイナミックな変容が明らかになってき、従来の漠然とした肥料商=高利貸し資本的=停滞的というイメージは変更される必要が出てきた。そこでこれを踏まえて、本研究では、19世紀前半の市場変動のなかで肥料商がどのように対応したか、および地域市場の新たな動向を研究したいと考えている。

### 3. 研究の方法

方法としては、従来と大きく変わるものではないが、現地調査による調査による新しい史料の発見と撮影によるデータ蓄積がまずなにより大切である。肥料商の史料は極めて少なく、申請者が調査を開始するまで、まったくといっていいほど注目されていなかった。現地調査から少しずつ発見があり、これを分析することで実態が明らかになった事情がある。今回も播磨・阿波を中心に調査を行い、史料の蓄積と分析を行った。また史料の大半が帳簿なので写真データを読解して、エクセル・データを作成する作業が必要である。これは史料収集と並行して継続的に行う必要があり、膨大な手間がかかる。そうした蓄積をもとに分析と論文化が要求されているのである。本研究では、播磨の的形中村家の調査、阿波の覚円村天野家文書を中心に調査を行い、分析を進めた。また播磨相生の浜本家文書を中心にデジタル化の基礎作業を行った。

### 4. 研究成果

(1) 白川部達夫「一九世紀中葉における播磨の在村肥料商の動向」『人間科学総合研究所紀要』22号、2020年3月、単著、232~219頁

播磨国神東郡藪田村高馬家の幕末・明治期の肥料仕入れを分析した。高馬家は、藪田村の名主など勤めた家で、19世紀に入って肥料商売を始めたと考えられる。文政4年(1821)には姫路干鰯仲買仲間の定が残され、同13年(1830)には、兵庫の干鰯屋仲間の吉田屋与兵衛と干鰯販売の委託契約を結んでいた。これによりこの頃兵庫の干鰯屋が播磨東部の農村へ進出していたことがわかる。幕末から明治30年代までの仕入れ帳により、当時の播磨の魚肥流通が窺えるが、幕末期には室津が仕入れの中心だったものが、明治期にはいると兵庫(神戸)や飾磨が中心となっていったことが明らかとなった。播磨国では、姫路藩の元で播磨西端の室津が干鰯市場を独占していたが、19世紀に入ると播磨中央部の飾磨港が台頭し、干鰯市場の開設を認められた。こうしたなかで高馬家の幕末期の仕入れは、室津からのものが中心となったが、明治期に入ると飾磨・兵庫(神戸)と移っていったことがわかる。

(2) 白川部達夫「近世阿波における肥料取引の諸相」(『東洋大学文学部紀要』71集史学科43号、2018年2月)単著、47~76頁

阿波国では藍作農民に藍商が肥料を前貸しして、藍葉で決済していた。藍商は藍葉を集荷して藍玉を生産して、これを全国に出荷していたのである。この構造のなかで、藍作農民は貧窮化したとされる。しかし一方で、阿波藍の生産は幕末から明治前半までは成長を続けた事実があり、近年では、藍作農民のなかから中小規模の藍師・藍商が成長し、これが19世紀の阿波藍の生産を支えたとする理解が生まれている。本論文はこれを踏まえ、阿波の藍作地

帯の魚肥取引史料を検討した。ここでは18世紀後半からの魚肥販売の事例を網羅的に概観し、幕末期の在村肥料商の販売帳簿を分析した。ことに後者では、安政3年(1856)では、まだ干鰯販売と収穫期に藍葉で代金を決済することが一般的で、前貸し利子も14.4パーセントであったが、文久3年(1863)になると、藍葉で決済したものは38パーセント程度に過ぎず、12パーセントの前貸し利子が適用されているものが25パーセント現れた。藍商の魚肥前貸しによる藍作農民支配は弱まっていたといえる。小規模藍商は藍葉集荷のための魚肥前貸しという方向を必ずしもとらなかったことがわかる。こうした動きが幕末・明治期の阿波藍生産の活発化を生み出したと考えられる。

(3) 白川部達夫「大坂干鰯屋と諸藩」(北村行遠編『近世の宗教と地域社会』岩田書院、2018年2月)単著、267~295頁

大坂干鰯屋と諸藩の関係を近江屋長兵衛家文書や大坂干鰯商仲間記録等から紹介したもので、19世紀になって諸藩の魚肥専売と大坂直売にたいする干鰯屋の動きが明らかになった。19世紀になると諸藩は江戸の干鰯問屋を通さずに、国産干鰯を大坂に出荷しようとした。また大坂でも干鰯屋仲間を仲介しない販売を計画するものが出た。藩国産干鰯の直売買の動きである。これについては、いままで江戸干鰯問屋にかかわるものはある程度明らかになっていたが、大坂についてはまったく検討がなかった。大坂では、諸藩が国産干鰯を販売するに当たっては、必ず干鰯屋仲間が取引していた鞆市場を通すように要求し、これを認めないと、干鰯屋仲間が一致して干鰯を買うことを拒否した。大坂干鰯屋仲間は問屋と仲買商で構成されており、仲買商は農村の肥料商や消費者農民と結んでいたため、これを迂回して、直接農村部へ国産干鰯を販売することは難しかった。また大坂干鰯屋は、例え江戸干鰯問屋を経由しない国産干鰯でも、鞆市場さえ通せば販売を積極的に認めたので、諸藩は結局は大坂干鰯屋の要求を受け入れて鞆市場で販売することになったことを指摘した。また江戸干鰯問屋が抗議して、差し止めになったと従来考えられていた上総大多喜藩・水戸藩などの干鰯が大坂干鰯屋の手で実際に販売されていたことを明らかにした。さらに近江屋長兵衛が遠州相良藩の国産干鰯を扱い藩財政改革に関わった事情を紹介した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 白川部達夫	4. 巻 なし
2. 論文標題 大坂干鰯屋と諸藩	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北村行遠編『近世の宗教と地域社会』（岩田書院）	6. 最初と最後の頁 267-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白川部達夫	4. 巻 71集史学科編43号
2. 論文標題 近世阿波における肥料取引の諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東洋大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 50 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白川部達夫	4. 巻 22号
2. 論文標題 一九世紀中葉における播磨の在村肥料商の動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 219-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----